



町内会短信8月号

葉月

2021年8月1日
川沿中央第一町内会長
柴田田鶴子

連日、時として東京より暑い猛暑が続いております。町内会の皆様、北海道では「暑さもお盆迄」と言われております。あと半月、この猛暑を耐え抜きましょう。「来月こそ、来月こそ神頼み!!」コロナ禍以来、毎月町内会短信を執筆する筆者のコロナ感染者数減を願っての気持ちですが……。東京オリンピック開催前、複数のウィルス専門家の予測通りの三段跳びの如くの感染者数の飛躍的増加(特に20代～50代の増加数が目立つ)に底知れぬ不安がよぎります。コロナ後 国力の衰えた我が国を担わねばならぬ若者たちの心身の損傷が我が国の経済回復に大きな打撃となるのではと危惧しています。真っ先に優先的にワクチン接種を受けた後期高齢者の一人として、今後社会的に貢献するであろう若者たちの方がワクチンは優先接種されるべきでなかったか? とワクチン未接種の若者たちがコロナのデルタ株が原因でバタバタ倒れ、回復後も様々な後遺症に悩まされていることを見聞するにつけ、高齢者の一人として何ともやり切れません。

今多くの人々は胸に不安を抱きながらも「反対と言ってはみたがテレビに映る五輪選手の健闘に一喜一憂している日本国民の一人」であるという矛盾……。

7月18日(日) ヒヤヒヤしながら町内会部長以上の役員会開催、今後の町内会行事の確認をしました。コロナ感染拡大を見据えながらも町内会の子も達の為に今夏唯一の行事である『ちよこつとだけの七夕祭り』で、時間短縮3回に分けてお菓子と短冊を配る行事のみ実施し、8月末迄の行事は全て中止と致しました。7月18日の札幌の感染者数が74人、10日後の7月28日は倍近い139人と約一週間で2倍の増加です。札幌が開催地である8月上旬のオリンピックマラソンを控えての感染者数は想像するだけに恐ろしいの一言です。

若い方々へ コロナのデルタ株はワクチン未接種の若者を容赦なく襲います。急激な容態悪化もあり得ます。長期間にわたる感染防止で気のゆるみから、幼児や小学生等に感染させない様、御家庭内で今一度感染防止を徹底し、不要不急の外出は控えましょう。

8月の町内会行事予定

8月4日(水)	どんぐり公園清掃日	9:30~10:30	Bグループ (6, 7, 8, 9, 10班)
8月6日(金)	ちよこつとだけの七夕祭り	於 どんぐり公園	
	◆幼児	17:30~ /	◆小1~3年生 18:00~ / ◆小4~6年生 18:30~
8月11日(水)	ふれ合いガーデン整備実施日	8:30~9:30	ぐらい
8月18日(水)	どんぐり公園清掃日	9:30~10:30	Cグループ (11, 12, 13, 14, 15班)
8月25日(水)	ふれ合いガーデン整備実施日	8:30~9:30	ぐらい

【川沿ふれ合いガーデン便り】 熱中症に気をつけてガーデン草取り水やりをしていますが、水不足で今年の夏の花は勢いがありません。秋のコスモスにご期待を!!

裏面へ →

郷土史より (視野を広げて) —クラーク博士の志 (1)

郷土歴史家 吉田邦行



北海道の人口も20万人目前の頃、かねてより懸案だった日本で初めての農業教育専門学校である札幌農学校を、明治9年8月14日開校した。前身は同年5月4日、東京芝の増上寺内に開拓使仮学校として開校、その後7月に札幌学校と改称、8月に札幌に移転して更に9月7日に札幌農学校と改称している。校長は開拓少判官・調所広丈(スシヨ ヒロタケ)が兼務した。開校に当たり、すでに帰国していた元開拓使顧問ホーレス・ケプロンの助言を得て、マサチューセッツ農科大学学長のクラーク博士(はくし)が、同校に席を置いたまま来日することが決定し、明治9年7月31日札幌に到着した。その日は彼の50歳の誕生日であった。札幌学校(後に札幌農学校→北海道大学)の初代教頭として、8月14日任命されたのである。

クラーク博士は、1826年アメリカ北東部マサチューセッツ州の裕福な医師の息子として生まれ、進学先は政治家や法律家を目指すエリート校の州立アマスト大学である。成績優秀なクラークは、同大学から西ドイツのゲッチンゲン大学へ留学、博士の学位を取得、帰国後アマスト大学へ戻り26歳の若さで化学教授に抜擢された。他にも植物学・動物学の教科を受け持つ凄腕の教師であった。クラークは34歳の時、南北戦争に義勇兵(北軍大佐)として参加している。奴隷解放との理想に燃え、生徒と共に戦場に向かった。しかし現実には厳しく、激しい戦闘のなか、教え子たちは次々と銃弾に倒れた。戦死者はアメリカ全土で62万人、多くの若者が倒れ国土は荒れ果てた。

国のため若者のため、自分に何が出来るのかを悩んだ。そこで荒れ果てた国土を復興させるために、若者たちに農業を教えようとの結論に達した。それで40歳の時、自ら賛同者を募りマサチューセッツ農科大学を設立し、学長に就任したのである。そこでは主に牛を飼育し、牛乳や乳製品を生産する酪農に力を注いだ。欧米で人々が、牛乳を飲むようになったのはこの頃である。それは当時最先端の農業分野であった。丁度その頃、日本からの使者が訪れ「ぜひ、日本で最先端の酪農を指導して頂きたい」と依頼している。それは北海道で新たに作られる学校で、2年間かけて酪農の専門家を育ててほしいとのことであった。当時の日本は、倒幕の戊辰戦争で国土も民も疲弊していた。復興の要として、北海道の開拓に当たる指導者を育てようとする考えであった。クラーク学長の胸に去来するものは、南北戦争で銃弾に倒れて行った教え子たちと、荒れ果てた国土の姿であった。同じ境遇に日本は直面し喘(あえ)いでいる。クラーク学長は「日本渡航の件について」理事会を開いたが紛糾した。理事の反対理由は「学長が2年も留守にすることは聞いたことが無い、日本は内戦を終えたばかりで危険すぎる、なぜ日本へ行かなければならないんだ」であった。反対の意見が次々と上がる中、クラーク学長は決断する。「諸君、聞いて欲しい、私は日本へ行きたい。2年間が長すぎるのであれば2年分の仕事を1年で終わらせて戻ってきます。日本の復興の力になりたい」と強い意志を示し了承された。当時としては命がけの挑戦であった。(次号へつづく)